# ―ガイダンス・カウンセリングの時代

深美 隆司

今年の六月中旬、ある地上波全国ネットで東野圭吾原作の映画「容疑者xの献身」と「真夏の方程式」が連続して放映された。どちらも物理学者、湯川学（福山雅治）が主人公のサスペンス劇場映画である。私は今夏、学校の教員研修において、このネタを使ってきた。どういうことかというと、この二作のエンディングが時代の違いを象徴しているのである。「容疑者x～」は、従来どおりの勧善懲悪、予定調和の結末を迎える。つまり、罪を犯したものは必ず罰せられる、なのだ。他人の罪をかぶって殺人まで犯した石神（堤真一）が護送車に乗せられる直前に、ヒロイン花岡靖子（松雪泰子）が現れ「私も罰を受けます……」と。それを見た石神は泣き崩れる……。というラストシーンである。テレビで放映されるようなラストは、こうでなければならなかった。

しかし、「真夏の～」は違う。私は、昨年、この作品を映画館で観たのだが、そのエンディングに愕然（がくぜん）とした。終わり方が「常識」ではなかったのだ。ヒロイン成実（杏）は殺人を犯したのに、罰せられない。成実の育ての父（前田吟）も殺人を犯していたのに、過失致死、死体遺棄で終わってしまう。私は思わず心の中で叫んだ。「えーっ、こんな終わり方、ありですか！」と。実の父、仙波（白竜）が、成実の身代わりとして、刑期を終えている。

これまでのサスペンスドラマでは、そういうことは許されなかった。罪を犯した者は、何らかの制裁や罰を受けることが常識であった。しかし、くり返すが「真夏の～」は違う。主人公、湯川の言葉を借りれば、「すべてのことを知ったうえで自分が進むべき道を決める。」のである。湯川は、何度もこの映画の中で語っている。「ご覧になっている皆さんは、事実とその背景をすべて知ったうえで、ご自分で判断してください。」ということなのであろう。この作品に貫かれているテーマだ。ちなみに、「容疑者x～」は二〇〇三年原作、「真夏の～」は二〇一〇年原作である。

この国は、一九九〇年から二〇〇〇年までの十年間に大きく変容した。その1 インフレからデフレへの転換。一九八九年末、約三万九千円をつけていた株価は、怒濤（どとう）のように下落していった。それがバブル崩壊であることに社会が気づいたのは九〇年代半ばのことである。それ以来、〝厳しい〟数字の上昇は現在まで続いている。「子どもの貧困率」の最高値更新などは、経済が子どもに影響を与えている顕著な例である。つまり、「生活苦」が進行しつづけているのだ。

その2 高度情報化社会への突入。一九九五年のwindows95の発売と、携帯電話の普及は、全世代的な人間の振れ幅を大きくした。情報端末機器を主体的に活用する人間と、端末によって依存的に支配される人間の振れ幅である。時代は、スマホ、タブレットの時代。いつでも、どこでも、誰でも、端末を活用するのか、支配されるのかという選択肢に直面している。しかし、残念ながら多くの人たちがこのことに気づいていない。

この二点において、私たちのコミュニケーション環境は大きく破壊されたのである。しかも、その3 少子高齢化、その4 地域社会におけるグローバル化という問題が加わり、私たちは、かつて経験したことのない勢いの多様性化と個性化という現実に直面することとなった。一九九〇年

# 個の力が問われる社会

代以降の時代は、そういう時代なのだ。自然災害であれば、私たちは、それに備え、意識を高めるであろう。しかし、このような社会現象は静かに進行し、私たちに迫ってくる。しかも、「失われた十年、二十年」などという懐古主義的発想が、この気づきへの障害となったのだ。

教育の世界では、このような社会変動に対して、対応していく動きがあった。「構成的グループエンカウンター」「アサーショントレーニング」「グループワークトレーニング」などのグループアプローチの登場である。グループアプローチとは、「参加体験的な学習により、好ましい人間関係や人間力を育成する」というものだ。二〇〇〇年までに、後発のグループアプローチも含めて、多くのものが成立をした。つまり、教育の世界におけるワークショップとファシリテータの誕生である。グループアプローチのほとんどは、「認知（知って）→行動（やってみて）→評価（どう感じた）」という手順を踏む。そして、ワークショップに参加した者は、自分自身の気づきから成長のプロセスを歩みはじめる。これがワークショップであり、その気づきと学びを推進していく者がファシリテータである。グループアプローチによって呼び名は違うが、どれも同じような役割を果たしている。時代の変化に危機感を感じた教師たちは、自然発生的にワークショップを活用し、ファシリテータであろうとした。

一九九〇年まで、「一生懸命勉強すれば、一生、保証された生活が待っている。」という枠組みがたしかに存在した。だから、子ども、保護者、地域からの学校への信頼は大きかった。しかし、その枠組みは、崩れた。いまや、学校のベテラン教師は、「かつてのやり方が通用しなくなった」と嘆く。かつてのやり方で育った若い教師は、「どうすればいいのか」と、右往左往している。

このことに気づいた自治体では、二〇〇〇年以降、グループアプローチの実践成果をかき集め、**ガイダンス・カウンセリング**としてカリキュラム化し、プログラムとして教育現場で活用してきた。「子どもの社会的スキル横浜プログラム」「かわさき共生＊共育プログラム」などである。また、学校レベルでは、埼玉の「社会性を育てるスキル教育」や大阪の「松原市立松原第七中学校区人間関係学科（ＨＲＳ）」、島根の「松江市立第一中学校　こころ♡ほっとタイム」などがある。

これらのガイダンス・カウンセリングに共通するものは、**「主体的な個」「今の社会を生きる力をもつ個」の育成**である。規範意識等を外から注入し教え込むのではなく、個の内面から体験的に構築していこうとする。人間の集団を、枠組みから個にあてはめるのではなく、一人ひとりの成長から、人間力と共感性を備えたよりよい集団に育てようというものである。

このためには**モデルとしての教員の成長**が欠かせない。つまり、ガイダンス・カウンセリングを正しく実施すれば、子どもも教員も育つのだ。「認知（知って）→行動（やってみて）→評価（どう感じた）」の教育への体現である。もう一度、湯川の言葉を思いだそう。「すべてのことを知ったうえで自分が進むべき道を決める。」まさに、教育はガイダンス・カウンセリングの時代である。

（ふかみたかし　あいあいネットワークof HRS）